

中学校でスクールカウンセラーを勤めていたころ、先生方は、年々増える親御さんの苦情対応に苦慮されていました。毎晩教師宅に電話をして説教を繰り返す、自分と仲の悪い親の子どもの行動を逐一学校に報告する…このような理不尽なケースとは別に、日常の些細なトラブルで、子ども自身の解決への取り組みを待たず、代わりに解決しようと、

親御さんが攻撃的、被害的になってやってくるケースも多く、戸惑ったことを覚えていきます。しかしこれは、「養育」の最中には、自然なことかもしれません。養育者が被養育者である子を守ろうとする行動は、自然の摂理であり、尊

いものです。

しかしながら、最近では、「養育」を過ぎた大学においても、自分でやるべきこと（手続きや問い合わせなど）、自力で取り組むべき問題（友人関係や進路選択など）で、親御さんが代行したり、代理相談にいらしたりするケースが増えてきました。大学生の課題は自立へ

の集大成であり、自分で悩み、自分で考え、自分で行動することが必要ですから、親の「こころ」は尊くとも、「代理行動」が青年の力を奪うことになりかねない…カウンセラーとして、この問題にはよく悩まされます。

このような親御さんがいらしたとき、私は、「親自身のよりどころのなさ」を感じます。

学生相談室
だより62
カウンセラー 阿部千香子

子どもが問題を抱えたとき、自分から離れて自立していくとき、その不安やさみしさをじっくり抱えるのはとても大変なことです。しかも、その思いを分かち合う相手がいないという孤独を抱えていたら、なおさら。

相談、時には苦情と言う形で大学にいらつしやる親御さんの話がかがっている、「よりどころ」として学校を選び、分かち合おうとしていらつしやることを感じます。そんな親の心中を知れば知るほど、「モンスターパーアレント」という言葉で片付けてほしくない、という思いが強くなるのです。